

水なし、電話なし…「私らは負けない」

花畑中 60年前の開拓記

創立62年目を迎えた福岡市南区の花畑中学校の金庫から、開校当時の様子を克明に記録した絵日記「創立の一年間」が見つかった。書いたのは当時教頭を務めていた春日泰さん(1992年に77歳で死去)。開校日の1

福岡市

1955年4月1日から始まる185ページの日記には、水道なし、電話なしで当時は「辺境の地に立つ同校で、難題に立ち向かう苦闘と、生徒への愛情が色あせることなくつづられている。



60年の時を超えて、絵日記「創立の一年間」を手にする花畑中の生徒たち。福岡市南区の花畑中(1956年当時の花畑中)校舎が狭く、廊下に「職員室」があった(花畑中提供)

三宅中(南区大橋)への通学が遠い生徒のために地域住民が土地を寄付するなどして開校したとされる花畑中。赤土の丘に小さな校舎が立つだけだった。

55年4月1日、(渡辺通)1丁目に行き、25円を握って検原行きのバスに乗り込む。映画に見る西部劇のような山に来て開拓の仕事。辺境のたくましく精神が必要だ。よしやってやろう。

無い無い尽くしの学校に苦悩する日々の連続。しかし、春日教頭の決意は揺らがない。

《同13日、春を謳歌する》

当時の教頭 絵日記で残す



春日泰さん
=1956年撮影、久保山順子さん提供

には絶好の地だ。「丘々を見晴す丘のひばりかな」。只、現実に頭がもどされた時に苦勞が生じる。水が無い、電話がない、生徒は純朴であるが羨が無い。「花畑の山猿」だ。

5月20日、水、水、水こそは宝。学校が会社にかかけ合い、市役所にかかけ合いして、長い永い日数をかけてやっと水が出る様に。

(水を丘の下までくみに行き)長い急坂をバケツをさげてよちよち登る生徒のいちらしい姿も見ないで済む。

運動場の整地作業を行う自衛隊員のために風呂まで工面したり、植樹したりと、学校の礎を築いた春日教頭。「いつも人のために動いていた父らしい」と三女久保山順子さん(66)福岡市南区にはほほ笑む。